

Title	21:過去45年間の東京歯科大学における血管系病変の統計
Author(s)	山本, 圭; 山田, 玲菜; 明石, 良彦; 中條, 貴俊; 中島, 啓; 國分, 克寿; 高野, 正行; 片倉, 朗; 松坂, 賢一
Journal	歯科学報, 121(2): 187-187
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/5487">http://hdl.handle.net/10130/5487</a>
Right	
Description	

## No.21：過去45年間の東京歯科大学における血管系病変の統計

山本 圭<sup>1)</sup>, 山田玲菜<sup>1)</sup>, 明石良彦<sup>1)</sup>, 中條貴俊<sup>1)</sup>, 中島 啓<sup>1)</sup>, 國分克寿<sup>1)</sup>, 高野正行<sup>2)</sup>,  
片倉 朗<sup>3)</sup>, 松坂賢一<sup>1)</sup> (東歯大・病理)<sup>1)</sup> (東歯大・口腔顎顔面外科)<sup>2)</sup> (東歯大・口腔病態外科)<sup>3)</sup>

**目的：**血管系病変は頭頸部で最も多くみられることが知られている。ISSVA 分類では、血管系病変は血管奇形と腫瘍性病変に分けられている。血管奇形には従来の海綿状血管腫、静脈性血管腫、毛細血管腫などが分類されており、腫瘍性病変は膿毒性肉芽腫、血管内乳頭状過形成、血管内皮腫、血管肉腫などが分類され、そのそれぞれに病理学的特徴がある。

今回我々は、血管系病変の発生部位による差異および血管奇形と腫瘍性病変における発生の差異があるかの検討のため、統計および調査を行った。

**方法：**1975年から2020年までの45年間に東京歯科大学千葉病院（現千葉歯科医療センター）と水道橋病院で検鏡された組織診59,137件中、血管系病変と診断された病理組織検体を対象として統計調査を行い、年齢、性別、採取部位、病理診断名について集計した。

**結果および考察：**全症例数は952件（1.6%）であった。年齢は0～91歳で発生しており、平均年齢は51.3歳であった。性別は男性が441件（46.3%）、女性が509件（53.5%）、不明が2件であった。発生部位については、舌 260件（27.3%）、下唇 246件（25.8%）、頬粘膜 171件（18.0%）、上唇 94件（9.9%）、歯肉 62件（6.5%）、口蓋 31件（3.3%）、口角 12件

（1.3%）、舌下 11件（1.2%）、下顎骨 11件（1.2%）とその他 53件（5.6%）、不明 1件（0.1%）であった。病理診断名に関しては、海綿状血管腫が438件（46.0%）、毛細血管腫が164件（17.2%）、静脈性血管腫が157件（16.5%）、動静脈性血管腫が8件（0.8%）、筋肉内血管腫が23件（2.4%）、類洞状血管腫が13件（1.4%）、中心性血管腫が2件（0.2%）、乳児血管腫が1件（0.1%）、膿毒性肉芽腫が124件（13.0%）、血管内乳頭状過形成が15件（1.6%）、血管内皮腫が5件（0.5%）、血管肉腫が2件（0.2%）であった。発生部としては舌（27.3%）が最も多かったが、上唇、下唇および上下不明の口唇を合算すると、36.7%で口唇での発生が最も多くなった。舌、下唇、頬粘膜、上唇においては海綿状血管腫が最多であったが、口蓋においては膿毒性肉芽腫が最多であった。同じ口腔内でも、部位ごとに発生する病変に違いがあることが示唆された。ISSVA 分類における血管奇形は759件（79.7%）であり、腫瘍性病変は147件（15.4%）であった。本学において、血管系病変の大半が血管奇形であった。しかし、口蓋および上唇においては腫瘍性病変の割合が高く、口蓋および上唇の血管系病変の切除時には取り残しなどに注意する必要がある。

## No.22：スペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科におけるスペシャルニーズ患者の臨床統計

松永 健, 野口智康, 福田謙一 (東歯大・障歯・口顔痛)

**目的：**東京歯科大学水道橋病院スペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科は2017年4月に新設され、対象疾患は多岐にわたる。当科の臨床統計を行うことにより、どのような疾患にどのような治療成績を残しているのかが明確になる。これにより、かかりつけ歯科や医科または病院内からの紹介先として適切な選択が可能となり、結果として患者に提供する医療の質は高くなるものと考えられる。そこでわれわれは、スペシャルニーズ患者の臨床統計を行い、どのような患者にどのような管理を行っているかを調査したので報告する。

**方法：**東京歯科大学水道橋病院スペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科に2018年4月から2020年8月に初診で来院したスペシャルニーズ患者の診療録から総患者数、性別、年齢、来院理由、紹介元、疾患名、管理方法を調査する。

**結果：**スペシャルニーズ患者の総数は288人で男女比は3：2で女性が多かった。来院理由は院外紹介が77%、院内紹介が5%、紹介状なしが18%であった。スペシャルニーズ患者の内訳は歯科治療回避者

（歯科恐怖症、重度嘔吐反射を有する患者）が48%、障害者、有病者が52%であり、歯科恐怖症で治療に対する障壁を持つものが最も多い結果となった。障害者、有病者の52%の内訳は知的能力障害が最も多く、自閉スペクトラム症、認知症、循環器疾患などが続いた。管理方法は通法下が62%、モニタリング下が5%、静脈内鎮静法が31%、全身麻酔が2%であった。

**考察：**スペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科は開設して5年を迎える。2020年度はコロナウイルス感染症の影響により、新患者数は2019年度の半数となった。また、紹介状を持って一般開業歯科から紹介となった患者は77%で、スペシャルニーズ歯科開設時（27.3%）と比較して増加している。これは当科の認知度が向上していると考えられる。2021年度からもかかりつけ歯科診療所や近隣の病院、障害者歯科センターと医療連携を図り、患者に円滑な医療提供をすること、さらに広く認知してもらい新患者増加を目指すことがスペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科においても重要であると考えられた。